

俺が高校卒業したら死
ぬ未来を変えるのは間
違っている。

ブラックマツハ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

プロに勝った事がある何度も憑依したバカが主人公の比企谷八幡に憑依するのは間
違つてゐるを第一章にしました。

この主人公は原作知識が全くないので、バカなので基本頼りにならないです。

その変わりにとてつもなく頼りになるチート能力や人間かと驚く程の身体能力を
持つています。

第二章になつたのでタイトルの題名と関わります。

死ぬ事を知つていながら回避する事は、今まで俺は出来ないし攻略方法を俺は知らな
い。

俺は転生する度にその体験を卒業式の日に強制される事になる。そして天気や体調など気にせず卒業後を終えて次の日になる時には異世界に飛ばされてしまう。

そして交通事故に遭つたり、ナイフを持った男にナイフで刺された瞬間に飛ばされたりする。もう殺されるシーンに説明などなく、俺は飛ばされてしまうのだ。俺は泣きながら何度も死んでしまい新しい世界に転生する。

だが勿論クリア方法はある事は知っている。何故知っているか。それは同じルールで1000人が挑んで3人クリアしていたのだ。

俺はそんなクリア率0・3%に挑むのだ。どうクリアすればいいのか分からない。

そしてこの世界にクリアしても戻れるかも分からない。拒否する事が出来ない。

残された時間は後約、2年6ヶ月。もう既に始まっているのだ。

それまで俺はは最高な友達を作る事にするが、知らない人だけど原作キャラには会いたい。

目次

プロに勝つた事がある何度も憑依したバ カが主人公の比企谷八幡に憑依するのは 間違つてゐる	何で高校生活スタートからと言つてイ ベントが多くすぎる	この派手な服装の男は誰だ!! 目的は秘 密ふざけるな	恋する金髪美少女と王者トオルへの挑 戦	死のカウントダーンが迫つている事に気 がつく
34	1	11	24	80

町以外の原作キャラに出会い何かが起き
る!!

俺が2回も振られてしまうのも悪くは
ないのかも知れない

今日の振り替えりと俺の失恋後の物語

電車でトオルが失恋を思い出してる時
いろははどうしていた!?

誠司はトオルと出会つてすぐに、いろ

はを紹介した理由はなんだ!??

俺は死なない

比企谷八幡（比企谷トオル）は始めて小

1 何で高校生活スタートからと言ってイベントが多すぎる

プロに勝つた事がある何度も憑依したバカが主人公の比企谷八幡に憑依するのは間違ってる

何で高校生活スタートからと言つてイベントが多すぎる

4月と言えば入学式である。今回の話は総武高校の入学式に主人公が向かう物語だ。
入学式と言えば1年生学校に通つて色々緊張して慌てたりするものだろう!!

この話の主人公達兄弟姉妹は慌てる様子も全くない。どれくらい余裕なのかと言うと、6時からのラジオ体操に毎日通うほどの余裕がある。そんな主人公達はとても優等生と思うかもしれない?だが違う。バカ不良やブラコンなど様々な問題があるが、バカは全員共通だ。

そんな馬鹿どもについて軽く紹介するが、聞きたくない人は左下の端にある②の所まで飛ばして欲しい。

まず男の主人公から次は姉から年齢順に書くとしよう。

主人公の名は原作主人公の比企谷八幡で又の名をトオルだ。原作の主人公に憑依したバカである彼は「陸上の1500メートルでプロの選手に勝つた事がある男だ。」

そして何度も転生した転生者である彼は、一度も「陸上のプロの選手になつた事がない！」何度かチャンスがあつたのだが、高校に通う事に毎回している。

そして高校を卒業したら同じタイミングで、何度も彼は死んでしまつた。それはいつかトオルが話す事だろう。

そんな不幸な感じで、見た目は目が死んでる細マツチョで原作通りの顔をした比企谷八幡である。だが自己紹介する時は、必ず前世の名前の比企谷トオルだと言い、先生に修正されてもう一度名前を言わないといけない。

だが彼は正しい名前を言わず比企谷トオル八幡となんか変な名前を言つてしまつ。

次に主人公の2歳上で金髪美人の比企谷鈴音だ。彼女は転生前から名字は変わつたが、名前は変わらず鈴音と言う名だつた。

彼女は今回が初めて転生した美人な女性だ。彼女の前世でも又主人公の姉だつた。

そんな彼女は不良に憧れていて、主人公を殴るのが、趣味の怖い美人の女性だ。決して主人公以外は殴らないと言う意志がある、美人な彼女だ。

前世の彼女の職業は女優で、一度も不思議な事に不良役の仕事はしていない。そして殴る役もしていないのだから驚きだ。

次に主人公の2つ年下の妹は未来と原作通りの小町で誰も憑依してはいない。

3 何で高校生活スタートからと言ってイベントが多すぎる

彼女達は双子でもあるが性格は全然違う、そして髪の色が違う。未来は青髪である。未来はただプログラコンであつて、他人も同じ考え方になつてほしいと願う。他の性格は全く分からぬ女性なのだが、ほとんど主人公の言われたり頼まれたら引き受ける。最後に未来は転生者で催眠術にはかかる。

小町は原作通りであるから解説しなくていいだろう。

② ここからは主人公に任せるとしよう。

自己紹介も終えたしな。催眠術はそのうち後で関わるから待つていろ。又新しい人物が出てきたら俺様がする事になる。「タイム」て主人公に呼ばせたら俺様だと思え。切り替えるぞ。

タイムの王様サイド終了

主人公サイドスタート

さて俺はそろそろ学校に行く時間となつたため向かう事にする。そもそも行く時間で言つたが大分時間の余裕がある。約1時間30分く

(久しぶりの高校に行くのだが興奮するけどしつかり学校生活送れるかな。それよりもバカだから大丈夫か心配だよ。気にしないで行こう。)

「じゃあ俺は先に行つてくるよ。遅刻するなよ姉と妹共又な。」

笑顔で手を振ると腹に思い切り殴られたのだがこれは絶対愛情ではないはずだ。しかも笑顔でそんな美人な人は知らない人ですよね。……それ実は姉です：

誰もいのに何を言つているのだろうか。

「気をつけていけよ。車に轢かれるなよアホ。心配してることからよ」

「それは殴る相手がいないからだろう。少しは俺の事を心配してくれ。」

そう言つた途端に悲しい顔をした姉がいた。どうやら本気で心配してゐみたいでこれはどうしよう。こんな今すぐ泣きそうな姉の顔見た事がない。一度も見た事がないから対応の仕方が分からぬ。

こう言う時は謝つて許してもらうのがいいだろうと思つた俺は

「俺が悪かった。ごめんなさい」

と言つて直ぐ頭を下げた。謝る俺を姉が見ると泣くのを辞めて、顔はイタズラをしてやつたような顔で言う。

「何言つてるんだアホか」

ハイ速攻で謝つた瞬間姉にアホと言われたのだが、どう言う事なんですかね。全く分からぬですね。

(解説役のトオルさん教えてもらつてもいいですか。……それ俺に聞いてどうする!!)

5 何で高校生活スタートからと言ってイベントが多すぎる

心配したのになんだよあの態度は)

では未来にでも聞いてみるか。小町と未来はため息をついて教えてくれる。

小町が先にな。

「まつたくこれだからゴミいちゃんは」

「演技だよ」

そうですか。演技ですか!!そんな冗談全く聞きたくないのだがどう言う事なんだ?
だって俺は演技で騙されない自信がある。それを超える程の事なのだろうか。

(そのタイミングで笑顔になるて事は演技だ。絶対演技だ。演技に間違いない。)

て事で俺は演技が分かるプライドを捨てて信じる事にしました。忘れていたけど、ゴ
ミいぢやんて小町さんから聞こえたけど気のせいだよね。

(うんきつと大丈夫だから気のせいに違いない。もしそう言われたらアニメを見るか
走つて忘れないと無理だからやめて。)

「じゃあ行つてくるぜ」

「「行つてらしゃい」「」

姉と妹共に見送られて俺は学校に向かう。もう行き方は覚えているから問題はない。

大きく腕を振りながら大股で歩くのだ。

(真っ直ぐに前へ歩くのみ。あっこ右だつた。真っ直ぐに歩くのみで言つた奴どいつだよ。俺だよ。何で大抵誰だと思う人物は俺なんだよ。このままだと本当にゴミいぢやんて言われるよマジで。)

しばらく歩いているとヤンキーが一人いた。流石はヤンキーの制服派手でカツコイ
イ!! 着てみたいな。

俺は本物のヤンキー見るの初めてだが千葉でヤンキーが多いのかな? 俺は会つた事
がないけどさ。そんなヤンキーが今ナンパして速攻で振られた。良かつたのかな? ま
あいいのではないか。それで世界が平和になるのだ。

彼女は誰だろう。俺と同じ学校の女子みたいだな。彼女はこの原作キヤラなのかど
うか、分からないけどそれよりもやばい! ヤンキーが更に彼女に近づいてるが他の人
は誰もいない。

(動け俺この足で助ける。助けるつもりなのですが、助ける計画はない。バカだから
計画立ても無駄だぜ。行け俺の足)

俺は怖いが、頑張つてナンパ野郎の所にビクビクしながら、怖がつている足を前に一
歩でも早く進める。なんとか、ナンパ野郎と彼女を両方見る事が出来るポジションにい
る事が出来たので、後は説得するのみだ。

まだナンパ野郎は彼女に近づいただけである。

「あのナンパ俺もしたいのですが」
「ナンダトコラ」

カタカナみたいな感じに聞こえるな。これがヤンキーの迫力かすごいな。だが俺は怖くない、姉で俺は慣れてしまつたからな。だから問題がない。

（それより俺が最初に言つたのがナンパて何で、ナンパするんだ。ノープランだよ。
「これだからゴミいちゃんはダメなんだよ」

なんで心の中に小町が出てきたのだ。俺はゴミいちゃんではないでしよう

俺は慣れてると言つたがやはり怖かつたけど勇気を出して言つてみた。

「ナンパしようと思つたのですが良く考えてください。ヤンキーと彼女が付き合つたとして、もしそれがキツカケで彼女がいじめられたらどうするのですか？責任とれますか
!!」

「責任取れない。考へていなかつた。教えてくれてありがとうな。ヤンキーの女子をナンパしに行くぞ。」

（どうやらあの男ヤンキーの中でもいい人なのかもしない？いやただ単純な男なのかもしない。学校の行く逆方向に向かつてゐるから学校の事絶対忘れてる。大丈夫か心配だが戻ってきたから安心だな。）

それよりもナンパされた彼女が心配だ。

「大丈夫ですか。ヤンキー怖かつたですよね。あのヤンキー迫力がありますからね。でも何も起こらなくて良かつたです。」

俺も怖がられたみたいな感じで無言だったの失礼しますと言つた。そして俺は走つて彼女から距離を取つた。だが一瞬彼女の目からハートマークが見えた気がする。もしかしてヤンキーの男の去り方が好きで惚れた。

俺が邪魔しなかつたら付き合つていたら申し訳ない。

（一体彼女は誰なんだ!! それにしても彼女可愛かつたな。原作キヤラじやないか? 俺は知らないからそう思う。原作知らないで色々考えられるからサイコウーー なんだよ）

家からしばらく歩いているのだが、桜が見えない。ハア学校行つての途中に桜見えなくて残念。

横断歩道を此処で渡つて曲がればもうすぐだ。俺は近いて来た横断歩道を見ていたら犬がいる。信号はもうすぐ赤になるから急いで助けるぞ。

制服のため動きにくいや気にしない。俺は走つて一気に加速する。少しづつ車の音が聞こえてくる。犬を捕まえ手でなんとか安全の通路に置く事に成功する。なんとか

犬を安全な所に置けたので良かった。

俺は手で犬を通路に置いた後そのまま俺の足をのせようとしたら、小さな段差につまづき後ろに倒れそうになつて、そのまま後ろに下がつてしまふ。転ばなかつたが右を向くとまさか、車によつて俺の顔と体ごと衝突し見事氣絶するみたいだ。
(俺の人生は終わつた。又終わつてしまふのかよ。)

そう思つた瞬間氣絶した。

（それから3日後）

俺は病院に三週間入院する事になつたが元氣である。まあ痛いが慣れてあんまり交通事故にあつた感じがしないのは頑丈な体だからだろうか。

ご飯はしつかりと食べているしもつと食べたいくらい食欲がある。だから早く家で食べる料理が俺は好きだから食べたい。

俺は今とてもしたい事がある。学校に行きたいのかと聞かれれば全く違う。

（しつかりとしたレース場で強いやつと走りたい。そして負けたくない。俺は走つてるのが好きなんだ。だから俺は怪我が治つたらいつでも走れる準備を進めないといけない。）

そのため今も隠れてスクワットをトイレの中でしている。トイレ以外基本一人に出来る事がないから本当は腕立て伏せや腹筋をしたいのだが、床が汚いのでそれも出来ない。

いし、怪我した所をカバーしていく腕立て伏せをしたら看護師によじこれでバレるからしない。勿論スクワットだつてバレたら怒られる。

やつぱり俺は早く退院しないと精神的につらいのだ。

そして現在午前10時ちょうど俺が、スクワットを終えて布団に入つた時誰かが俺の部屋に入つてきた。

(初対面なのに、やつと退屈を忘れる人と会つた気がする)

続く

この派手な服装の男は誰だ!!目的は秘密ふざけるな

タイムの王様サイド

さて今回は俺様が前回まであらすじをしながら裏での悪さについて話す。

これから始まる高校生活を楽しみにしていた主人公のトオル（比企谷八幡）は、一時間以上余裕をもって早く家を出た結果罠にハマり交通事故にあった。罠に嵌めた犯人は神様であるが決して悪さをするつもりはない。

本来なら主人公は交通事故には関係なく、犬が車に轢かれそうな場面にもいない。そして犬はどうなつていたかは分からぬが多分車に轢かれていただろう。神様は犬を守るために時間稼ぎをしたのだった。そう、主人公は原作より速く学校に行っていたのだ。

次は罠について話すが、これは犬を助けてあげるため仕方がなかつた。前話では書いていなかつたが、周りに人はいなく助けられる人物は、主人公しかいない。その交通事故に会う前に主人公の近くにヤンキーがいたのを覚えているだろうか？その彼にナンパするように仕向けたのは神だ。彼は簡単に騙されてしまつた理由は神が言つたたつた一言だけだ。

「君にとつて運命の女性だと」

たつたそれだけでバカで人の言つた事を信じるヤンキーの彼はやはり信じてしまい、ナンパしてしまつたのだ。

なら何故、主人公に神が話せばいいと思うかもしないが、ルールで未来を伝えてはいけないのだから仕方がなかつた。

さてそろそろ主人公の話に戻すため今の状況を話す。

交通事故ににあつて現在病院に入院している彼に誰かが部屋に侵入してきた。侵入してきたて事は、病院の関係者や家族でも友達ですら違う人物だ。

ではその侵入してきた人が、誰なののかは俺から話せないから主人公サイドで楽しんでくれ。

又なんかあれば主人公に「タイム」と叫ばせる。

タイムの王様サイド終了

主人公サイド

何か物凄く迫力がある服を着て いるイケメン男が現れたのだがどちら様なんでしょうか？知らない人だが、どつかで会つた事があるような気がするのに中々思い出せな

い。思い当たる人物は誰もいないし、イケメン野郎の知り合いなどいため知らない人だ。それに見た目は高校生だが金曜日なのに制服を着ていなら不良で間違いはない筈だ。だとしたら彼なのではないかと思う人物がいる。そのイケメン野郎の正体が分かりすぐに叫んでしまう。

「お前もしかして3日前にナンパした男か!!」

「どうやら覚えてくれたみたいだな」

「勿論覚えているのだけどこんなにイケメンだとは気がついていない」

(やはり不良でイケメンが本当は多いのかな? だって本当に男だけど分かるほどだぞ、スゴいぜこれは。)

そう思つたが俺は一度も不良と会つていない事に気がついた。

それよりも何でこの男は学校をサボつてまでここまで来たのかさっぱり分からない。ここに来るのには大分時間がかかるはずだと俺はそう思つていて。わざわざバス乗らないと行けないそれなりに歩くからだ。大抵バスを待つのを合わせて1時間くらいかかるだろうか。

「何でお前はここにいる?」

「いきなりそれ聞くのか。いい度胸してるじゃないか!!」

「喧嘩したくない。お願ひだから喧嘩はやめよう」

「俺は簡単に喧嘩をする男ではないから安心してくれ」

喧嘩をする訳ではないみたいだが、そんな迫力が彼にはあったので俺は全く信じていない。

(だつて絶対しようとしてただろう。「いい度胸じゃないか」は喧嘩するか認められるのかのどちらかだろうきっと。分からぬ俺でもそれくらい知っているからてビビつてナイヨ。)

だが誠司は勿論殴る準備はしていなかつた。だから今は信じる事にしたが、完全に信用はしていない。俺だつてヤクザがいたら暴力されないか安心出来ないのだ。

にこやかにナンパ野郎は笑い恐怖を感じる。別に怖い笑顔ではなく全く反対でいい笑顔であつた。いきなり笑顔になると本当に笑つてるのかが、分からず恐怖を感じるのだ。そんな笑顔が怖いナンパ野郎に話しかけられた。

「まあまあ焦るなよ。それは後のお楽しみにしよう」

「俺は早くそれを聞きたいのだが仕方がないから待つ事にしよう」

「そうだ。面白い作品の漫画をあげるぞ。中々面白いから読んでみたらどうだ!!」

「なんだこれは知らない漫画だが、作者は有名な人みたいだな。」

俺は一度も読んだ事はない作者で、人気は今一番あるのだが名前がトオルシロウでペンネームが嫌だ。俺の名前のトオルで更に同じカタカナのためとても嫌だが、頑張つて

欲しいとは思う。

本当は読みたくないのだが、せつかく貰ったのだから読んで見ようと思う。人気が一番あるから楽しみだ。

「顔洗いたくないか？俺の妹の未来が綺麗なバケツに大量の水を持つてきやがつた。良かったらそれで、顔でも洗つたらどうだろうか」

「なら勿体無いから使わせて貰うぞ!!」

はいお客様聞きました。この人何も考えず顔洗おうとしてますよ。戻があるかもしないのに何も考えずにね。勿論戻などないけどね。

（それにもお見舞いでいくらなんでも大量の水はどうかなと思うよ。最初はコレで布団を汚してかと思ったが絶対に違う。なら顔を洗えになるがまさか流石にしないだろうなと思う。）

そもそも水で布団を汚す考え方はいくら馬鹿でもしないと思う。

（せめて2リットルくらいのペットボトルがいいよ。完全にお見舞いとしては関係ないが貰えた事だけでとても嬉しい。）

他にお見舞いで貰つたのは、俺が参加してる陸上のレース会場では速く復帰しろとするさい手紙と果物が届く。

（俺は車に轢かれたのだから仕方がないでしよう！少しばは待つ事を覚えなさい子供じや

ないのだから。復帰は直ぐにするから安心していやがれこの野郎あの野郎。）

「おいナンパ野郎リンゴ食べていいぞ。冷蔵庫に入っているから取つて遠慮なく食べていいぞ」

そう言うとナンパ野郎は顔を洗うのを辞めて獣のように冷蔵庫に向かう。冷蔵庫からリンゴを取つて幸せそうにゆっくり食べる姿はとてもかつこいい。不良じやなかつたら絶対モテるはずだと思う。

「ありがとうよ。美味しいなこのリンゴ。もつと食べたいが食つていいか？」

「仕方がない沢山食つていいぞ。好きなだけ食べろ。ナンパ野郎」

俺はそう言いながらベットにゴロンと寝転がつた。やはりスクワットしただけで疲れてしまふし、大分無理してしまつたから車に轢かれた所の傷が更に痛く感じる。やはりベットは疲れが出るし癒される。

癒されながらナンパ野郎を見ると、優雅にのんびり果物を食べている。果物はリンゴ以外にも巨峰やミカンなどがある。レースの大会のビデオを撮つてゐるついでに、そのレースの関係者から姉がもらつて來ている。

ついでに俺は、休みの日以外ほぼ毎日その大会のレースに参加しているが、当分病院に入院したのでゆつくり休む事になる。さつきも言つたが復帰は必ずする!!

果物を届けてくれた姉からは特にお見舞い品はない変わりに、俺が読みたい漫画や本

を大量に持つて来てくれている。

(何も注文してないのに何で俺が読みたい漫画や本分かるの?分かるのだからブラコンなのか?姉の友達がブラコンなのかと聞かれた現場を見た事があつて凄く否定されて流石に傷ついたな。)

小町からはお見舞いとしてアジサイを貰つた。アジサイて夏や秋じやなの?そんなイメージが俺にはあるのだが。ナンパ野郎は最後のリンゴを食べる前に俺の疑問の答えを言った

「ワハハ。おいお前アジサイを貰つたみたいだな。アジサイの花言葉知つているか。
【元気な女性】て意味だぜ。これは最高に面白い。お前女性だつたんだなワッハハー!!
こりやあげた人の顔が見たいぜ!!」

(え俺小町に女性だと思つていたの?俺本当は男なんだぜ。俺も花言葉知らないから良いけど。しつかりお店の人に花言葉を確認しましようね小町!!俺が困るからね。お願ひだから確認をしつかりと宜しく。)

すると最後のリンゴを食べ終えたナンパ野郎が話す。

「さて果物食べたします学校をサボった理由を言う。

あれは4月の入学式の事だつた。俺はナンパしようとは思わなかつたが、神様に運命の女性だと言わされたのでナンパする決意をした」

「あのもう少し先まで話してくれないかな。これ日が暮れちゃて夜になるよ。」

「ノーそれはダメだ。それは出来ない」

「タイム」

主人公サイド終了

タイムの王様サイド

話長いから俺がまとめておいた。これの後にその後の続きを主人公にする。

①「何故ナンパ野郎は学校をサボつたのか？」

ナンパ野郎は学校をサボつていません。学校にいます。ではどうやつてしてるのでか詳しく述べます。

彼には分身を作る事が可能でそして殴られても分身は消えないそうだ。消すにはそのナンパ野郎が解除と言わないと消えない。

今回は分身がコツチに来て、本体は学校にいるそうだ。ただ分身は1人しか作れないが、不死身である。交通事故に遭つても無傷だから最強である。更に分身は顔等自由に変える事が出来るそうだ。

②「誰からその能力を獲得したのか？」

トオルの転生させた神様だそうだ。流石神様でほんの能力を転生者の一人一つ

叶えてくれる。つまり彼も又この神様に転生した人物だと言う事になる。トオルは勿論持つているが直ぐ話す事になるだろう。

以上だ。本当にこれだけの話なのに長くしようとしたすぎなんだぜ。30分も話したぜ。

タイムの王様サイド②終了

主人公サイド②

何とか話を理解出来たが物凄く話が長くて聞くのがつらかったのは俺だけなのかな?

(いや長すぎるから少しばかり聞いてる俺の事考えてよ。更にさ、30分も話してナースさんが来たのは良いがタイミング悪い。分身の話だから厨二病の友達がいるんだなど可哀想な人だと思われたよ。絶対この男許さない)

「よし次にお前のせいでの声が枯れて来たよ。ドリンク買ってくるから待つていろ。」

喉が枯れたにしては元気があるよう見えるのだが、分身も喉乾いたりするのだなと気がついた。

「俺のせいにしないでそれはナンパ野郎のせいだから人のせいにしてはいけないで教わってないの?」

「俺誠司て名前なんだぜ。それにしても良いじゃないか！俺の長い話をしつかり聞いて突っ込んでくれたのはいないな。会った事がない。よし決めた。さて今後が楽しみだ」そう謎の言葉を言つて飲み物を買いに行きやがつた。この男は俺の質問に答えるつもりは少しづかいため質問に答えてくれない酷い男なのだ。

俺もペットが立ち上がり冷蔵庫からマツ缶を取り出して飲んだ。

はじめてそのデザインを見た瞬間何故か体が勝手に飲みたくなるから買つたら甘くて最高だった。そこからはほぼ毎日飲んでいるのだ。ただ後1回飲んだら冷蔵庫のマツ缶は全部無くなってしまう

しばらく飲みながら待つていると、十六茶を買つて堂々とイケメンがいた。

（俺にイケメンの友達などいないから知らない人ですね。

……それがなんと今日から友達になつたて凄いよ。

「お祝いだからマツ缶を買つてこい未来」て言いたいけど学校だよ。いいや諦めた。）

「ほらよお前はスポーツドリンクが好きなんだろう。買つておいたから美味しく味わえ

よトオル」

「ありがとう誠司。これ大好きなスポーツドリンクだ。2リットルのペットボトルを

買つてくれてありがとうな!!」

「当たり前じやないか俺らは友達なんだからよ相棒。て事でこれからは相棒て呼ぶぜ」

「いいな相棒て響きとてもいい。俺一度でもいいから相棒て呼ばれたかつたのだ。」

俺は一度も相棒と言われた事がないし友達だつて言われた事もないから凄く嬉しい。友達て自然に出来る感じでで気がついていない内に出来るから言われる機会は全くない。だから友達が俺と友達ではないと言われる可能性も十分にありえるのだ。

そして俺は一度も友達だと今日まで聞いた事が1回もなく、聞いた事は全く覚えていない。それは俺が陸上系の友達しかいらないからだろうか？

(さて気分を切り替えよう明るく切り替えよう。俺なら出来る筈だ。)

そんな俺を急に真面目の顔になつて誠司が見ているからビッククリした!!

「さてお前にやつて欲しい事があるのだがどうだろうか？」

「俺入院中だと言う事を忘れていいない。俺元気に見えるかもしけんけど入院中の分かつてくれない」

「勿論その後にして貰う事になるはずだから安心しろ。て事でやつてくれるか？」

「やるはずがないじやないか？俺はめんどくさいのが嫌なんだ!!」

「なら原作キャラの女性と会えるとなつたらどうだろうか？やるしかないだろう!!」

それなら別にいいのではないかと思つた。知らないキャラだが仲良くなりたいとは思つてゐるけど、この目で大丈夫かな。それで人生狂つたようなもんだよ。ウイルス扱いされたりして大変だったからな。

「まず最初にやる事を説明してくれたら考えるから内容を教えろ」

「内容を教えたらやる事は決定するがいいのかな？」

「秘密時点で既になんか怪しい感じが出てているのですが、大変そうな気がするのは俺だけなんですかね」

怪盗になつて沢山の宝石を盗むの。絶対捕まるから俺は絶対嫌だよ。それとも誠司を朝起こしに行くの!! それも嫌だからね。

「安心しろ。バイト代は出るから安心しろ。後は俺が自転車でドッカンとやって、こうすれば終わる」

「あの全く分からぬのだが説明求めるのはダメじやん。聞いたらそれしないといけなくなるから聞けないじやんかよ。ふざけんなーー。それに安心して2回言つた事は更に怪しいだろう」

何も答えず俺のセリフを無視して、何事も無かつたかのように帰つて行きやがつた。
(マイペースすぎだろう。あの誠司て男は。ふざけてるのか分からんし喧嘩はしないけど、オセロで勝負してやるからかかつて来いや。)

そう俺が言えたらかつこいいのだが無理に決まつていてるし喧嘩するの怖いぜ。勝負するのはオセロだつたのだがな。

～それから二週間後～

何事も無く、あの男も現れず平和な時間だつたがもう直ぐ壊れるのだろう。病院を退院するのも後2日で後一週になるが随分長く感じたけどもう直ぐ終わるのだ。自由が帰ってきたのだ。

今日は日曜日の午後5時である。ものすごい勢いで誰かが足音を立てて走つている。病院の中では走つてはいけない筈だ。では誰なのだろうか気になるが本を読むのに集中したいので無視する。

無視したいが周りがうるさくて集中が出来ない。周りはたつた一人の金髪美少女の事について叫んでいる。

「金髪美少女が来てる。凄く美人だ。ナンパしてくるから待つてろ」

「金髪美少女が階段を華麗に美しくはないのに力強くて凄くいい」

「オシャレな服を着てるぞ」

(オシャレな服を着た金髪美少女、そんなの俺の友達にはいないから知らない人ですね。きっととイケメン野郎の彼女に決まっている)

「おい金髪美少女が停まつたぞ。此処に彼氏でもいるのかよ!?

そしてなんとタイミングよく俺の所に誰かがドアを開けようとして空いた。

それはなんとオシャレな服装のきんば美少女だつた。

続く。

恋する金髪美少女と王者トオルへの挑戦

主人公サイド

金髪美少女がドアをノックして開けて入ってきたのだが、こんなオシャレな服を着た金髪美人に知り合いはいない。今回は本当にガチの方で知らない人だ。知つていたとしてもオシャレで誰なのかが分からなくなる

俺はもう少し待つてほしいので言う。

「少しお待ちください」

ドアを閉めて戻つてくれた。ひとまず安心だな。そんな余裕はない。

(どうしましよう。どうしましよう。「美少女がいるのだからお部屋を片付けないと企ケ谷家の恥だ」)

と言われるかもしれない。

未来の水が邪魔だ。転んだら大変だ——。未来のバケツの水をトイレに流すか——。そして小町が買つてきたアジサイも漫画を大量に置いて隠す——。小町の名譽のためにも俺の為にもアジサイを隠すぞ——。アジサイは花言葉で「元気な女性」だつた気がするが女性は事実で男じやない——。)

後は床だがあいにく掃除道具がない。近くになんとかして床を綺麗にできないか？
近くにティッシュがあるから使おう。使わないよりかは綺麗になるだろう。ティッシュ
を3枚濡らして絞り床を全面拭く。その後乾いたティッシュで濡れた所を拭いて
多少は綺麗になった。

「どうぞ。中に入つてください」

彼女はドアを開けて入つて來た。

「大変大変」

声で姉だと分かつたが、なんでこの姉はめちゃくちゃオシャレな服を着ているのかが
不思議だ。

「絶対にオシャレな服は好きな人が出来るまで着ない」と姉がそう言つていた。

いつもは制服かジャージ、パジャマや部屋着の彼女で目立つ服装をした姿を見た事が
ない。

服に興味が余りない未来からもつとオシャレな服着たらと言われた程だが、言う事を
聞かなかつた。大抵未来の言う事に賛成する事がが多い気がしたが、それだけは譲れな
かつた。小町も何か言おうとしたが、姉の目に脅されてびびつて何も言えない。

勿論女優の仕事をしていた時はオシャレな服装を着ていたそ�だが、仕事と好きな人
が出来た時以外は着ないと決めているそ�だ。

そのためまさかここを映画の撮影場所と勘違いしている可能性はあるかもしれない。撮影場所なら不思議ではないが、ここは病院で映画を撮影する所では無い事は分かる筈だ。もしそうだとしたら、まさか俺が映画の主人公になるのかよ。めんどくさいからやりたくないし、どうせ俺はヒーロー系の映画の悪役みたいな役ですよね。主人公になれないと知つておきながら言つてしまい少し恥ずかしい。

じゃあ主人公はやはりイケメンヒーロー役でどんな奴がやるんだろうか。誠司ならその役に合いそうだしな。ヤンキーで強いだろうし、姉がヒロインみたいなオチですかね。身長も同じ175センチくらいだから問題無いと思う。

これ以上映画の事を考える暇などない。もう俺の姉が暴走しそうな感じだ。

「聞いてくれるのかな？殴るよ」

「殴る前に言つてほしいのだが、ビンタだけじやん。それより好きな人でも出来たみたいだな」

「うん出来たよ。いや元々好きだつたけどさ気がつかなかつたな」

やつぱり姉に好きな人がいるみたいで安心してよりは残念で感じだろうか。

(そいつはどんな奴なのか気になるが、もし悪い奴だとしたら俺は本気で怒るからな。それは一番困つてる時支えてくれたのは姉だ。殴るのは良くないが姉は優しさを持っているんだ。そんな姉が好きだ。今笑顔でいられるのも全て姉のおかげだからさ。笑

顔で笑えなくなつたら許さないからな。」

「どんな人を好きになつたんだ。教えてくれよ姉さん」

「陸上選手に憧れる高校生かな」

（笑顔でそう言われたらムカついてしまう。「陸上選手に憧れる男がここにいますよ」と言いたくなる。なら俺でもいいじやないか。イケメンじやないとダメですよね。）

つい知らない陸上のイケメン高校生に嫉妬してしまう。セリフもついイラつきながらこう言う。

「ムツムム高校生か？年下が好きなんだな。更に陸上好きて俺みたいな人だろうな!!」

「そうだよ。そんな人。それ以上は教えません。これからが楽しみだな」

（気になる!!これがからかわれて気分なのか？おのれイケメン高校生俺の姉を惚れさせやがつて、この野郎あの野郎。俺はなんでこんなにムカついているのだ。実は俺姉に殴られたかったのか？違う絶対に認めない。）

「でも惚れた瞬間は教えておく。走つてる姿に始めて会つた時と動画で改めて今日惚れたんだよね」

（ハーアーー、俺の方が走りに関しては感動させられるのだけど、姉には感動されないで酷くないな？そういうえば姉に俺の走つてる姿一度しか見せていなかつたな。なんかいうか心の中だけど

「とりあえず良かつたな、俺の姉は美人だから最高に運がいいぞ。俺の知らないイケメン高校生に送る一言」

俺はなんとしてもこの空気を変えたいと思ったのだけど何を言えばいいのか分からぬ。そもそも一度もそんな機会は：なんと1度あつたが振られる事が決まっていた。小学1年生が音楽の先生に恋をしてしまい、からかわれてしまい振られてしまった男が知り合いにいた。だがそれ以来そんな機会はなかつた。

逆にそう言えば告白されて困っていた女子がいた。返事でどう断るかが難しいと困つてゐるそうだ。その時も大変そだなくらいしか言えなかつたな。ダメだな恋愛系の話は俺の悪い所が出てゐる。

「あそだ。走つてゐ所を見せてくれよ。」

「ハイハイ

そう言いながら携帯で準備してくれてゐるが機嫌が悪いのは何故だ。もつと聞いてほしかつたのか？それは嫌だよ絶対に。もうどうせイケメンなんだと分かつたから聞きたくない。それに俺が恋愛対象として好きだと思われるのは……いいやーーだー。なんではつきり言えない、情けない。

準備が出来たみたいで動画を再生する。俺は右にイヤホンをつけて姉が左につけた。

「さあスタートまでもう少しです。今回のプロ級の1500メートルで注目選手は2人

です。一人目は元高校生最強の大学生湯月君です。そして2人目は逃げの王者トオル選手に憧れてる高校生牛虎君です。プロ級にははじめての参加です。」

「へえ高校生でプロ級に行つたのかまだ5人しかいないから凄いじゃないか。尊敬しているのが俺てのが実に良い。いいのだけど後で後悔しないでよ。目が嫌いなんで尊敬するの無理ですとか言われたら俺宇宙にジャンプして行つてしまふかもしれない。」

「湯月君は王者と呼ばれた男達とプロ以外には負けていません。3着以内には入つりますよ。そして大逃げで無敗の1・2連勝中の牛虎君です。後5回勝てばトオルを超える事が出来ます。戦績は2人ともどちらも負けていません。」

（あのさ目をキラキラしながら見てるけどさ目疲れないか心配だよ。そして2度目だからたいした事ないよね。まさかさつき高校生て言つてたような気がする。もしかして姉さんはこの高校生が好きなの？いかにも優等生ですからと言つて勉強出来ないのですね。ダサイて言いいそうな見た目だぞ。）

「見た目で判断するのは良くないな。」

（ごめんなさい牛虎君。僕を尊敬してくれたのに見た目で判断した僕を許してください。すみませんでした。お詫びに走り方のアドバイスを言いますね。馬鹿な俺が出来たら凄いけど出来るのか！？）

「始まるよトオル。準備はいいかな？」

「ああうん大丈夫問題は特にないから始めよう」

姉さんの優しい声久しぶりに聞いた気がするけど覚えていないな。この世界では一度も言われた事がないからな。いつも不機嫌で良く分からないが優しい姉さんだ。

(そんな姉が今は何か落ち着くんだよね。優しい友達みたいでさ癒されるんだけどさ、本人には言わないよ。

そういうえば俺の姉は……レースが始まつた。)

「さあ一斉にスタートしました。先頭はやはり牛虎です。大逃げ王者比企ヶ谷トオルのポジションですから誰にも譲らない。グングンと差を引き離す。これはトオル並みのスピードある大逃げで期待が出来ますね。

さあ元高校生最強の大学生は3番手。相変わらず彼も3位のポジションで譲らない見たいですね。初めての大外からスタートしたのに一瞬で3番手これは凄い」

ホウやはりそこにいるのか牛虎。湯月さんはここにいるが大分離されてるな。相当な実力者だがスタミナが保てるのかが心配だな。俺なら何処にいる先頭か。それとも最後方かどちらかだろうな。此処にアツイがいれば更にキツくなる。

レースはどうなつてる実況

「さあ、もう二人しかいない。此処からは二人以外相手にならないのか?一気に並びました湯月が並ぶ。勝負に出た湯月が勝負に出ました。これは凄いレースになる」

マズイかもしれないぞ。調子が悪いのか湯月は、焦りすぎだ。まだこの時ではないはずだ。姉から質問される。

「どうこの作戦をトオルはどう思う?」

「湯月の罠に引っ掛かる事が出来れば湯月が勝てる筈だ。」

「トオルがそう言うなら間違いはない」

何で俺は此処に出てきた。実況は

「牛虎此処で更にスピードを上げた。湯月は此処では勝負にでない。もしや牛虎を焦らせてるのでしようか?だがしかし、今はまだ牛虎のフォームは綺麗なままです。此処で第一コーナーをカーブする。綺麗に曲がった湯月が牛虎に並びそのまま追い抜かした。流石綺麗なコーナーの曲がり方でプロを越えるコーナーの実力者。観客からものすごい拍手が響いています」

そうか、もう牛虎以外他の選手に負けないと思つてているのか、湯月は? そうだろうな、此処で久しぶりの勝利を目指しているからな。これは90%で牛虎との対決は、湯月の勝ちだろうな。だがもし俺と同じ考え方なら牛虎は湯月に勝てるかもしねれないだろう。それが10%の可能性だから無理するなよ牛虎。そういうぞ落ちついてる。

「なんと此処でもう一人の選手が来た!! 運喰が1人、5人抜いて見事な牛蒡抜きで今集団を抜いた。今先頭を目指すが間に合うのか。おっと先頭の二人のペースが少し落ち

ている。それを持っていたのか？運営にとつてこれはチャンスになつた。最後方から
のもの凄い追い上げで集団を抜いたみたいに先頭に追いつけるのか？流石運がいい男
です」

俺はこの運営男が勝つと思つてゐる。彼はロングスパートが得意なのだからもう勝
てるだろう。俺らしか負ける所を想像する事は出来ない中学生なのだからな。もうこ
れ以上見ても展開は最後のコーナーを曲がつたあたりで決着が着くだろう。

俺の予想通りレースの展開は変わらず、先頭は湯月で、すぐ後ろに牛虎がいる状態で
変わらなかつた。そのまま最後のコーナーに曲がる。これで牛虎の敗北は決まつただ
ろう。そのはずだが湯月が牛虎を最終コーナーで引き離す事が全く出来ない！！

湯月のコーナーの曲がり方は理想的だが、それを4回くらいのコーナーの曲がり方を
見ただけで、牛虎はマネする事に成功した。それもオリジナルのフォームでだ。

そして拍手をする暇もない勢いでなんと湯月を軽々と抜かしてしまつた。一瞬の出
来事で驚いたがZONEに牛虎は入つたのだ。黒子のバスケのゾーンみたいな状態にな
る。そして5メートルくらい引き離す事に成功する。更に引き離す。そこでもの凄い
拍手が起きる。

そこで同じZONEのライバル運営が現れる。運営こそがこのレースで最後のラス
ボスだと言つてもいいだろう。

(さあ残り直接200メートル勝つのはどちらだ? どっちが強い。どっちの方が凄い走りを見せる。さあ俺をもつと先まで楽しませろ。流石運咲差を縮めて行く。)

「グイドーーン!!」

(もの凄い迫力のある足音だ。此処で更に引き離すのか牛虎。引き離す事は出来ない筈だが面白い。もつと見たいが残念ながら後100メートルでおしまいだ。これで終わりだ。)

運咲の凄い加速が出る足音が聞こえない。そして牛虎が更に引き離してゴール。運咲は3着で湯月に抜かされてしまった。何で聞こえない、まさかもう運咲の足音は聞いていた。馬鹿な。

俺は巻き戻したがZONEに牛虎が入る時に、運咲の足音が聞こえた。タイミングが速すぎて運咲はバテたのだった。どつちにしろ運咲は負けたのだろう。

「待つてます。トオル先輩。戻つてきたら直ぐに勝負です」

それから俺は姉に好きな人が出来た事も寝る事を忘れて、そのレースで俺は勝てたかどうかを検証している。次のレースにこの男に負けないために
つづく

死のカウントダーンが迫つてゐる事に気がつく

比企谷八幡（比企谷トオル）は始めて小町以外の原作キャラに出会い何かが起きる!!

さて俺はなんと今日ついに入院の期間を終えてやつと家に戻れる。もう既に戻つてきたのだけどな。

（俺の高校生活が帰つてきたぞ。何故喜ぶのが学校なのか分からぬがやつたーー、凄く嬉しいのだが自由で家に帰つてきたぞ。バンザイと手を両手を上げ下げしながら喜んでいる。）

「お兄さん喜んでる所申し訳ないけどさあ。学校ゴールデンウィークまでお兄さんは休みになつたよ。」

たつた一言で俺は絶望して喜ぶのを辞める。こうなつたらする事は一つで逆ギレだ。そうコレしかないのだ。

「えそんな、俺の学園生活はまだ始まらないのかよ。オイなんか逃げられているな。俺の学園生活にさ」

「ささつと切り替える。馬鹿なんだからトオル。殴るぞ」

「殴られてはいないけどビンタじゃないかよ」

姉の迫力ある言葉は相変わらず怖くて凄いな。先週の日曜日のあれはなんだつたの？あの優しい感じの姉は一体なんだつたんだよ。夢だつたのか？夢だつたなら納得出来る気がする。あれが夢でないとしたら雨でも降るのかもしれない。でもな、あの日見たレースインパクトを全く忘れていないから夢は違うだろな。

：いや絶対に夢じゃねえよ。だつてよく考えたら分かるじゃないか？俺は殴られていないのだから夢ではない。今回もビンタだけだつた。つまり絶対にこれは夢ではない事が決定する事となる。となると確実に好きな人が出来た事は確実だ。

「プルブル」

電話に気づいた姉と未来はどうか行ってしまった。「プルブル」なんか企んでいるのか？そう思つたが俺の陸上関係者かもしれないと思つたのだろうか？「プルブル」それなら納得だ。

さて電話が掛かってきたのはいいけど、知らない人から無視するかな!!怪しい人の電話はマジで嫌だ。誰だつて、そうに違ひない筈だ。「プルブル」だが話の達人は、知らない人でも間違えてかけても話せるらしい。30分くらい知らない人と話をしていたと聞いた事がある。まあそんな人は、「プルブル」知り合いにいけどな。

てか「プルプル」の電話音がうるさくて：「プルプル」

（…ハア仕方がない電源切るかな。…と思つた瞬間停まつたみたいでよかつたよ。）

「ピロン」今度はメツセージで、誠司だとさ。

「前の続きを実行する準備が出来たぜ。考える時間はもういいだろう。さあ決断をしろ。決まつたら此処に来い。嫌ならメールで断れ。宜しくなトオル!!コレが俺の家の写真」

さてじやあ決断はでた。こんな所に行きたくない。いかにも高級そうな家に行けと言ふのかよ。絶対迷子になつたら不審者扱いされるぞ。最初に聞かれる事はこんな感じだろうか？

「何故目がなぜ死んでいる」

「普通の目で怪しい薬もコンタクトもしてないですよ。」

「信じられるか。怪しい人物だ。疑わしい人物だからえ捕まえよう」

て感じで捕まりそうな気がする。実際に捕まつた事はないのだけど、大人になつたらそうなる筈だ。怪しい者は警察に電話すれば良いのだ。簡単な事だ。自分を追い込んでしまつている。

「お兄ちゃんせつかく友達出来たから行つてあげたら。お兄ちゃん走つて向かつたら、いい運動になるよ。」

「分かった行きますよ。走れるヤツホーサイコウ——だぜ」

俺は急いで携帯を持つて自分の部屋に向かう途中、何があつたみたいな不思議な顔をした未来がいたけど無視した時、部屋に着いた。さてどれを着るか迷うな？どちらも良いけどどうしよう？どうしましよう！！

「お兄ちゃん急いで時間がないんだから」

さてじやあ急いでこれを着ていこう。やつたー久しぶりに着るぞ。ドイツのチームのサッカーのユニフォームを着るぞ。黄色の服で俺は財布もそのチームのを使っている。ズボンはいつも履いてる陸上用のズボンで行こう。

コレで多少はスポーツマンを感じで警察が来ても掴まらないだろう。捕まる事が前提になるのはとても嫌だが、あの家にスポーツマンは必要だと俺は思う。さて良い気分になつての暇はないから小町に怒られる。

カバンに水筒とアメを入れて財布には3000円あるから持つていこう。コレは俺がレースに出て貯めたお金だ。本当はもつと沢山あるぞ。3000円でイチゴを大量に買うぞ!!喜んでいたからリンクゴも買うぞ。

よし行く準備は出来たから行つてくるぜ。俺はドアを開けて小町に行く準備が出来たと伝えた。直ぐ服を確認してもらつた。微妙な顔をしていたけど、ギリギリ服のチェックの小町審査には引っ掛けからず、無事に俺の部屋から通過した。コレでもう怖い

ものはない。飛行機に乗る荷物検査より緊張した。

そのまま小町は俺をグイグイとエスカレーターみたいに押される。だが俺は途中回避して、反対に小町を玄関まで連れて行くのだ。流石に妹とはいえ、女子に対して押されるのは嫌なので男である俺が押すべきだろう。

ドラクエの銅像を動かしてみたで楽しい!!本当はドラクエの銅像動かすの嫌いなんだけどな。それに妹に押される事はそこまで程嫌われていないのだ。よかつたよかつた。押す人が代わつても何も言わなかつた。流石に細マッチョである俺を押すのは大変だつたからだろう!!

「じゃあ行つてくるよ小町。あ住所知らない。小町知つてる」

「はい地図。小町にも紹介してね!そして誠司さんに宜しく!!」

俺はこんな怪しい人の場所を小町に教えたくないと思つてゐるがどうせ無駄だろう。なんで誠司の事を知つてゐるのか。小町と既に会つていた。コレが不良の情報力ですか?凄い実力を持つてゐるなこの誠司は。そう言えば誠司俺が入院してゐるのも知つていたな。恐ろしい男だぜ。

俺は無事に電車を乗る前に果物を買った。そして、誠司の近くの駅で降りて家を探すことになつた。ここまでよかつたが、地図感覚がない俺は迷つてしまふ。とりあえず警察に相談するしようと思つて街の人聞いて教えてもらう。

そして警察の場所が何処か聞いても分からず、又迷子になつた。気がついたら降りた駅に戻つてしまつた。

俺は仕方がなく誠司に携帯のメッセージで迷子になつて、こここの駅に戻つたから迎えに来いと送つた。すぐに迎えに行くと返事があつて直ぐに駆けつけてくれるらしい。流石頼りになる男だな。

俺は5分待つているとあら不思議な事にそこには美少女というより可愛い少女がいたのだった。髪は茶髪だろうか？あいにく俺は髪のこと知らないのだ。なんかよく分からぬ。

「目が死んでるので間違えではないはず。比企谷さんですよね？」

「ああ目が死んでる比企谷は僕だと思う。」

初対面だと緊張して僕て言つてしまふ。俺にとつて目が死んでいるはアピールポイントなのだ。まあそれに気がつくまでに何度も転生したけど気がついたから良いじゃないか？

今だつて目のおかげで気がついてくれたのだから感謝しても良いと思うね。迷子になるよりはましだ。ただ特徴がないから仕方がないと誤魔化しているだけなのだが。

「コレはご丁寧にどうもありがとう」

(あれおかしいぞ。なんで誠司の野郎は迎いに来なかつたのだ。あメッセージが來た。返信しよう。)

「腹空いたから飯食てるから代わりに原作キヤラに頼んでおいた。」

「おい。彼女は誰なんだ。原作キヤラで嘘じやないよな?」

「マジ!!信じて。お腹空いたからあとでね。もうメッセージ送るなよ!!」

「おいどんだけ飯の邪魔してイラついてるのだこの男はさ。短期は良くないけど、俺も短期な所あるんだよね。だからさ仕方がないよね。てか返事返すの早すぎる。まず彼女は一旦誠司の友達なのか。それとも一体誰なんだろ。聞いてみるか。」

「あの貴方は誠司の友達なの?」

「いいえ。いとこです。誠司兄さんの友達ですか?」

「うんまあ友達だと思うけど相棒で言つていたし。なんか誠司てマイペースだよね。自分が中心に世界が回つてるような感じでね」

「そなんですよ。ひどいんですよ。誠司お兄さんていうのも罰ゲームで負けて永遠に言わないといけなくなつたんですよ。それと此処です。」

「そんな罰ゲーム俺もした事はあつて勝つたけど何も言わなかつたんだよな。馬鹿な男が転生したら絶対やる事だと思うよ。もししていなかつたら君は天才なんだと褒めてあげる。」

「そうかそれはひどいなあ。此処が誠司の家かよ。迫力が満点だな。階段があつて高く
て更に迫力がすごい」

「凄いですよね。コレも罰ゲームで凄くないと思つても言わされるんですよ
「誠司さん罰ゲーム多すぎないか、いい加減にしやがれ」

ドアが開いた。そこには誠司がいたのだつた。コレは喧嘩の場面になるかもしね
い。彼女を逃すか？

「なんだトオルかよ。驚かしやがつて。いろは入らせてやりなあ。あれといろは最後
のカードを使う」

ゲームだとカードだつたら、モンスターが出てきたりするやつだ。絶対に物凄く強い
だらうなそのカードは、だつて色が「ゴールデン」なんだぜ。プラチナカードがあれば
勝てるのかな!!持つていなide。まさかこのカード罰ゲームのカードなの?

てかいろはて誰だよ。あ此処にいる彼女がいろはて名前だつたんだ。聞けてよかつ
た。て喜んでる場合ではない。早くプラチナカードだしたら勝てますよいろはさん。
てか震えてるじやん。コレじゃあ可哀想だろう誠司助けてやれよ。

「最後の願いだ。いろは。コイツの彼女になつてやりな?」

「あのさ誠司それは俺にとつては、ありがたい事だけど勝手に決めるのはどうかなと思
う！そしてさ、いろはさんが困つてゐるよ。」

「勝手に決めていいない。親からは認められているから問題はない筈だが。それに小町も賛成しているぞ。彼女が嫌だつたら許嫁でもいいぞ。どちらの許可を貰つていい!」

さてどうしようか途轍もないプレシャーかけないでいろはさん。仕方がない。此処はあれしかない逃げるだ。やはり流石にそんな度胸は俺はない。辞めておくべきだろう。かつこ悪いし、なら自滅技で説得するべきだろうか。この誠司に俺の最強の自滅技でトドメを刺す。

「俺みたいな死んだ目をした人にいろはさんが彼氏出来たとして自慢なんか出来ないじゃないか?」

「なら自慢しなければいい話だろう。どうせ今は好きになる事はないだろう。だが俺はいつか好きになると信じているのだけどな!!俺はそれを教えたいし嫌なんでもない」

「あの誠司君恋愛の先生みたいな感じだしてると振られたじゃん」

「うん知らないな。分身がやつた事で僕は知らないのさ!!て事でどうする!!」

さて俺はどうするのが正解なのだろうか?俺の人生で選ぶ決断はどうする。

(何も出ない。答えられない。空白のままだ。此処でカツコよく答えが出て欲しい)

「ドクンパリン」

今の効果音で俺は催眠術が解けて忘れていた自分を解放して、何故学校に通いたくなつたかが分かる。

（今俺が望むのは最高な陸上友達以外の友達が欲しい。それを達成するにはこの条件が良いかもしない。だが俺は変わっていない。自分から言うのは嫌だから後はいろはに任せること。）

俺はこれに賛成してしまったけど、いろはが決めた決断に俺は従う。

別に仕方がない事だから俺はいろはを泣かせたくないからな。

だから俺はその決断をなんとしても賛成するんだ。

「ピロン」誠司からメッセージが来たのだった。ポケットでメッセージを操作していたみたいだ。

「諦めたようだな。ありがとう。諦めてくれてよ」

てかこの誠司ムカつく 俺が諦める事を決めた事に気がつかれてる。だから俺は正直に返事する。いろはに全てを託すと、その決断に従うとな。メッセージで打ち込んでる時恥ずかしくなる。なにカツコつけてるのだろうと自分でも思うよ。

「俺からの最後のお願いだ。いろは叶えさせてくれ。頼む。なんなら1年でいい？ 実際に試してみろ。好きな人が出来たためのお遊びだと思えばいい。頼む」

「え誠司兄さんが始めて頭をさげた。」

あの俺人形ではないのでやめてほしいのですが無理ですか？ そうですか。

それより誠司はしつかり頭を深くさげて頼みこんでいる。頼みこむ姿勢がとても良

い。コレでいろはに対してははじめてだと凄いな。俺のイラついた気持ちももう無いよ。

いろはは、必死に考えている。その姿を見て可愛いと思つてしまふが俺は待つてゐる間どうしよう?とにかく可愛いと思つておけばいいのだろうか?そうする事にする。10分経過した。――

「分かりました。誠司兄さん乗せられてあげます!」

「そうかそれは良かつた死ぬかと思つた。ありがとういろは。一年でいいぞ。」

「比企ヶ谷さん、一年で彼女は嫌なので許嫁でお願ひしますね」

「おうそれでいいのだけど」

こうして俺の最高な友達を作るための仲間(いろはと誠司)が加わった。きっとそれがいい方向の未来に行くよう願う。俺にミスは許されない。タイムリミットはもう2年6ヶ月しかないのだからな。その説明は又いつかだ。続く

俺が2回も振られてしまうのも悪くはないのかもしれない

さて俺は現在やつと誠司の家に入る事が出来た。入りなと誠司が言つてから15分は外にいだろう。どれだけ中に入らせないのか不思議だ。だがゲームでは良くあるパターンだ。

家に入つていいぞと言つた事を忘れてしまう人物がいるんだよな。そんな人の家に入るタイミングがよく分からぬのだよ。まあ陸上友達しかいないから仕方がないか。実際にドアを開けると、若く見えるイケメンが仁王立ちでいた。そして相当喧嘩が強そうで、迫力が誠司の5倍はある。目を見ただけでビビつてしまつたが、直ぐ近くにいる、いろはを見て可愛いと思う。それで怖さを克服する事に成功した。なんかゲームでよくある耐性を獲得した気分になつた。克服耐性スキルの名はこれだ

「可愛さは怖さを吹き飛ばす」

(うーんなんか違うのだけど何が違うのかが分からぬ。そもそもネーミングセンスがマジでダメだから出直してこい。もつと短くしないといけないからな。だがとりあえずコレでいいか)

誠司の兄らしき人物が話してきた。

「俺は誠司の父で一色具咲だ宜しくな小僧。小僧は酒飲める歳なのか？飲めるなら一緒に飲もうぜ小僧!!」

（え、誠司の親父だったの若すぎませんかね。もう少し太つて欲しいくらいですよ。
嫌太つてくださいお願ひします。）

絶対言葉に出さないがな。

「ごめんなさい。俺まだ15歳何ですよ。ごめんなさいね。」

「親父お酒飲みすぎだぜ。俺と同じ歳だつて言つただろう」

「悪い少し酔つてしまつてすまない忘れてた」

やや悲しそうな顔を誠司の親父がしていたが、特に気にしていなさそうでよかつた。
もし気にしていたらもう一度謝ろうと思つたからよかつたよかつた。

「別に怒つてなどいないから気にするな小僧。謝るのはこっちの方だ小僧。オレンジ
ジュースでも飲んで、元気出そうぜ小僧」

「はいありがたく飲ませてもらいます」

「おうよ。コツチだついてきな小僧!!」

やつと仁王立ちで封鎖されていた道が解放された感じだな。ゲームや工事中などで
よくあるパターンだ。

それから30分後俺は無事に魔王城に着き、誠司の父率いる魔王具咲軍を倒す!!の反対でとても親切におもてなしをしてくれる。ここは魔王城ではなく魔王もいない世界なはずなのだが。

なんと今日の晩飯は……1万円の牛肉を沢山買つてくれたのだ。肉以外も含めて30万円くらいかかつたが、いろはに許嫁が出来たのだからいいらしい。コレが本当の金持ちだと感じられて凄いから来て正解だつたと一番思う瞬間だ。逆に行かなかつたら損していたぜ。

そして今日は焼肉で余つた牛肉お持ち帰り出来るそうなので姉共がとても喜ぶのだから最高だろう。久しぶりの初めての贅沢て感じだな。俺はそこまで程贅沢な食事はした事がない。そもそも金持ちに知り合いはいても、友達にはならなかつたから寂しい事言つた。

その時いろはが俺に何かを言う。

「あの比企谷さん。野菜もしつかり食べてくださいね♪」

「うはい分かりましたよ。食べますよいろは。ガブリく、苦手だ」

「中々いい関係じやないか。俺てやっぱりそれに気がつくなんて天才なんだろうな!!

ギヤハハアアー」

「そこまで程じやないだろ誠司、案外調子に乗りやすい性格なんだな!!」

ハアプロツコリーサー嫌いだけど食べてやつたよ気持ち悪い。ゲッブが出そうになるほど苦手だ。ハアこんなんで大丈夫か?俺はもつとキツイ試練があるんだ。死ぬ可能性大の試練に挑むのだからこれくらい頑張らないと。試練はこれ以上にもつと残酷で本当に辛い。それはこんなかんじだ

説明

俺は転生する度にその試練を卒業式の日に強制される事になる。そして天気や体調など考えず、卒業式を終えて次の日の0時になる時、異世界に飛ばされてしまう。

もう殺されるシーンについて何も説明してくれない。気がついたら、既にナイフに刺されたり、交通事故に何台か巻き込まれたりして俺は死んでしまう。

俺は泣きながら何度も死を悟つて本当に死んでしまい新しい世界に転生する。そして何度も繰り返して何度もあがく。

一度も成功する事はなく高校卒業してすぐに俺にとつて一つの物語が終わる。それは友達との出会いがなくなってしまう事になる。

俺の場合精神的に回復するには15年かかる。その間俺は催眠術を転生した後に催眠術者の女性にお願いする。

それがさつき変な音が聞こえて催眠術が解けたのだ。

だが勿論クリア方法はある事だけ知っている。それは同じルールで1000人が挑んで3人クリアしていたのだと神に教えてもらつた。それ以外は教えてくれなかつた。俺はそんなクリア率0・3%に挑むのだ。どうクリアすればいいのか分からぬ。そしてクリアした先には、このいろはのいる世界に戻れるかも分からぬ。

このゲームから回避する事だけは100%不可能だ。

残された時間は後約2年6ヶ月。もう既に始まつてゐるのだ。

説明終了

目的なんて言わなくていいだろ。それは前回教えてやつた事だからな。

「最高な友達が欲しい」隠す事でもないから言つてやろうと思つた。自分でも思うがめんどくさい人間なんだ。

さて話を戻してここからが大事だ。これだけで終わる筈がない事はわかつてゐる。何故そう思う理由は単純にやや誠司が緊張しているのだからバレバレだからだ。観察力が低い俺が分かるのだからな。

いつ仕掛けてくるかを待つてゐるのだが中々こない。ただ誠司がビビつてゐるだけなのだろうか？確かに誠司より迫力が全く違うのだからな。俺はよくわかつてゐない。

そう思つた時やつと仕掛けてきたのは誠司の親父だ。そう俺は、なんと敬語を使わず誠司の親父と言う権限を手に入れたのだが嬉しくない。そんな弱そうな権限などいら

ないよ。

「さてどうしようかな？このまま終わる訳がないと、分かつてはいるようだな小僧」

「ああ勿論わかっている。そう来ると分かつていた」

「えまだ何か企んでいるんですか？」

「どうやらいろはには気がつかれていないみたいだな。さてここで何を言つてくるんだ。ここからが俺との勝負の時間である。ニヤリと意地悪な顔をした誠司の親父が頼んできた。

「お前に頼みたいのは、いろはの勉強するための問題集を作つて欲しい」

「今それが出来るか考えていいか。紙と鉛筆が欲しいのだが貰つていいか？」

「勿論」

俺はそんな事が可能なのかを紙に書く。勿論俺が普通の人間だつたら紙に書いても答えは分からぬだろう。だが俺にはチート能力があるから可能に出来る。

俺のチート能力は何でも知つてはいるし、未来や相手の行動の事だつて分かる最高の能力だ。だが紙とペンを持つて紙に質問を書かないと、能力は使えないのが弱点だ。それと使いすぎると気持ち悪くなる。

それは普段考へてる事は一つなのだが能力を使うと沢山考へる事が出来るため限界を直ぐに超えてしまい気持ち悪くなる。

そして俺はその内容を理解するのは 難しい話以外なら出来る。だがほんと難しい話ばかりだ。

そして道具さえあれば車を作ることも不可能ではない。それは体が勝手にやり方が分かり、自動で動くため作る事は出来るのだ。それに車を俺が完成させた事実がある。

そして紙にひたすら書いて出た結果は勿論出来る事がわかつた。何も問題はなく世界で一番頭がいいA.Iよりも最適な問題を出せると自信満々に書いてある。何故か最近この最強の能力に感情が出るようになつた。

ただしその問題を作るには一週間に一度は必ずいろはに会いに行かないといけないそうだ。何故なら一週間でどれだけ理解できたかを丸つけをする必要があるそうだ。そしてその1日はどう勉強しているのかを観察しないといけないそうだ。

(とんでもなく面倒くさいがいろはのためだと思つて頑張るか!!)

そしてこの問題集と宿題以外の勉強はやらない事をお勧めしている。何故それをするのかは難しくて解読不可能だったが1000文字くらい書かれてあり最後には「馬鹿なお前には理解不可能だろう。中学1年レベル」

と悪口が書いてあつた。本当の事だから言い返す事は俺には出来ない。さてもう情報はないし話すか？

「結論は出た。不可能じゃないぜ誠司の親父。だがやつぱりしたくない」

「ここでは嘘をつく。もしそう言つたらどうなるかを知る為になるな。それと少しこの仕事をしたくない気持ちはある。素直にそう思うよ。でもいろはが目で語つている気がする。こんな感じだと思う。願いします」

「なんだよこれは振られてしまつたよ。俺じゃなく誠司に許嫁辞めたいと言えよ。俺はもう完全なる味方は出来ないよ。だつて許嫁になつて40分くらいで無しの方向になるのだから俺は何も言えないからな。振られるの早いなあ。

そんな残念な事に気がついた俺に

「嘘ついているな小僧。俺はそれが嘘だと経験で理解する事が出来るぜ小僧」

「親父きっと恥ずかしくて言えないだけだぜ。いろはに惚れているんだよ。やつぱりそれに気がつく俺は天才だなあ」

俺が知りたい事は聞けなかつたがまあいいだろう。それにそろそろフォローしないといろはに嫌われてしまう。しかし俺は何を言えばいいのだろうか。あれは冗談で本当にそう思つていないていうか。

「あの比企谷さんはて呼ぶの辞めてくれませんか?」

「うん分かつたよイロ、これでいいだろうて事で勿論問題集は作るぜ。ちよとばかし、か

らかつて見ただけだからな」

「私をからかって楽しんでいたんですか？もつとからかいたいと口説いているんですか。さすがに今の今だとちよつときめきようが無いのでまたの機会に出直してきて下さい、ごめんなさい。それとイロも辞めてください」

振られてしまつたよ今回はガチで俺とイロの物語は1年間で終わる事が決定した瞬間だつた。そういえばまたの機会で事は嫌間違いだ。これはイロのからかい方なのだろう？もう一度口説かせようとする作戦だ。そして振られてもらうそんな作戦だろうか。

（俺は引っ掛けられないぜ。自ら危険な行為をするのはメンタル的にキツイからな。）

ハア面倒くさそうな許嫁だけど可愛いから気にしない。そう振られたとしても許嫁で事は変わらない事は決まつてゐる。だつてもう許嫁を認めるパーティをしてしまつたのだから仕方がない。

俺が振られて落ち込んでいる所を無視して誠司の親父が話かけてきた。

（ちよつとくらい肉食べてリラックスさせて。もうメンタル0に近いんだからね。）

「詳しくその事について教えてくれないか小僧」「ああまず、俺は一週間に一度は必ずイロの家に行かないといけない。一週間でどれだけ問題が解けたかを見て新しい問題集を作る必要がある。ここで質問はあるか？」

「大丈夫だそれでいいだろう。」

「あの私が解けない問題はどうするんですか？」

「それは大丈夫だ。解説動画を俺の携帯に送られるから大丈夫だろう」

それを聞くと聞いてる全員がびっくりしている。その間に俺はチート能力にお願いをした。

「あのさそれ俺も動画欲しいのだがくれない？」

紙にはこう答えが書いてある。

「お前は俺がサポートするから大丈夫。そもそもお前は何もしなくてもいい。勉強は俺に任せて走る事を考えろ!!」

(頼もしいけどさ俺ダメ人間になるじやん。ダメ人間にさせてどうするんだ。川にでも捨てられるのかななんてありえない。)

話を戻して又質問を沢山されたが問題はなく答えられ、部活とレースがない毎週水曜日にいろいろはの家に午後5時に伺う事が決定した。心中ではいろはと言おうと決心したのだった。

しつかり問題集作りの仕事を果たさないといけないから頑張つていこう。契約書にサインしたし、その紙には、まさか小町の名前も書かれていた事は驚いたがな。これは更に小町の為にもしつかりしないといけないプレッシャーが半端ない。

後いろはとはメッセージで連絡を取り合う流れだが、無理矢理教えてやれの雰囲気になるのは嫌だ。僕が今のベストなタイミングでしつかりお願ひをする（冗談）

「俺とメッセージで連絡しようぜ」

少し俺のキャラとは合わない気がするけどいいだろう。結構俺なりには頑張ったのだけ。返事はどうだ。

「あっ、もしかして今のって口説こうとしてましたか？　ごめんなさい、ちょっと一瞬ときめきかけましたが冷静になるとやつぱり無理です」

もう終わつた2度振られたから終わりだ。もうおしまいだ。ここは土下座しかないのか？　嫌それは流石に断りづらくダメだ。三度目の正直だ。

「そこを何とかメッセージで連絡取り合うのをお願いします」

「仕方がないですね。先輩メッセージで連絡取り合いましょう」

こうして3度目の正直で俺は二度振られたがメッセージで連絡を取り合う事が出来た。

続く

今日の振り替えりと俺の失恋後の物語

俺は今電車に乗って家に着くまで今日の事を振り返る事にした。

① まず最初に俺は地図感覚が全く無い事が良くわかつた。

（どうでもいい情報から始めてしまった）

② 俺を迎えたのは、いろはて名の茶髪みたいな髪をした美少女だつた。その彼女は丁寧に道を教えてくれたそんな彼女は誠司に何度も負けて罰ゲームをされてるそうで可哀想な少女だ。

③ その罰ゲームが原因となり、誠司の所為で俺のレンタル彼女（許嫁）にいろはがなつてしまふ。嫌最後は彼女も認めていたから誠司の所為は違うのかな。その代わり罰ゲームはなくなる。

④ 誠司の親父と誠司は親子なのに似ていながらイケメンである事実は変わつてない。

⑤ 俺がいろはの問題集を作る仕事をする事になり、毎週水曜日にいろはの家に行く事になつた。行かないといけない理由は、最高な問題集を作るために、どう勉強しているのかとどれくらい正解出来たのかを確認しないといけない。

妹と姉を除く女子の部屋には2、3回程度行つた事があるが、最近は行つていないので緊張は少しする。多分問題は無いと思うがいろはの母親と会う時だけ緊張してはずだ。

⑥ いろはと連絡先を交換するために1回振られるが2回目に成功する。

振り返るの終わり

振り返る事を終えた俺は何故か近くにいるカツプルに注目してしまった。何故なのだろうと疑問を感じたが答えはシンプルだつた。

そのカツプルは帽子を交換していた所をたまたま目撃してしまい、俺もいろはとこんな関係になれるのか想像してしまつた。だがきっと俺らの関係は偽物で直ぐに終わるのだ。

俺はそんな想像をしているが、目標の為に利用しているだけであり、恋愛まで発展するつもりは全くなき。そもそも自意識過剰で、そんな簡単に彼女が出来たら告白して振られていないはずだ。

そう俺はいろは以外に振られてしまつた男であるがまだ思い出したくない。

その変わりに振られた後についてなら平氣だ。平氣なのだがそれを考えると走りた

くなる。

その日の夜から失恋のショックから立ち直るまでの物語だ。

振られた夜に事実を知った未来が俺に物凄く怒つた。そしてわざと焦げた唐揚げを俺の皿に入れた事があった。それでも文句言う力は俺になく、走つて気持ちを穏やかにさせようと思い外に行つた。勿論焦げた唐揚げを食べたあとにな!!

勿論泣きながら前へ進もうと走つたが、加速はせず軽くランニングをしている一般人にも抜かされてしまう程調子が悪い。それでも俺は1時間軽く走つた。

振られた翌日1500メートルのレースがあった。調子が悪くて心配だつたがレースに出て本気で永遠のライバル兄弟と走りたかつたから出た。元高校最強の湯月もいた。

俺の中でそれは最悪のレースであり最高なレースでもある。矛盾しているがそれは仕方がない程凄く嫌で良いレースだつた。

俺はスタートをミスつてしまい後ろから2番手くらいの所にいた。永遠のライバルの兄（金一）は前から5番手で後ろに弟が控えていた。湯月は3番手にいた。

俺は800メートル過ぎたのに、順位が変わらず全然スピードが出なくて、前に進めず最悪のレースだと気付き困つた。

（先頭でゴールして、振られた事を忘れてしまうインパクトが欲しかつた。）

そう思つた瞬間俺の気持ちは俺の体に伝わり、ありえないと思う程加速した。

ここからは最悪なレースだとゴールするまで思わず最高なレースだつた。更に興奮してしまふ事だらけだ。俺の夢の走りが今回初めて完成したと思つた瞬間だつた。

俺はもの凄い追い上げを始める。もうすぐ集団の先頭にたどり着く。後ろを振り返ると、後ろにいる選手達も俺に負けない様に加速する。

俺がまるで「走る神様」になつた気分だつた。

俺に抜かされても仕方がないと考えていた人が多く、勝ちたいと思う人は少ない。そんな彼らが俺の走りを見て勝ちたいと思つた瞬間なのだ。彼らは俺について行こうと必死である。

そんな彼らを感動させた俺は、先頭に立ち巨大な集団と共に、先頭を目指して更に加速する。俺の後ろからは「負けない」「負けない」と物凄く迫力を感じるオーラを感じて興奮してしまいスタミナを考えずもつと加速してしまう。

今思うとスタミナを考えないで走らないと先頭に追いつくのは難しい。集団の先頭に俺がいる時には、先頭争いを兄弟と湯月の3人が激しく争つていたからだ。

そして残り400メートルを通過して、先頭から約2秒くらいまで差を縮める事が出来た。勿論後ろには巨大な集団がいた。誰一人遅れる事は無く俺のペースに着いて来れた。

だがそろそろ限界の筈であると思い引き離す事にしようと決めた。残念ながら引き離す力はあるが残り100メートルまではこの力は残しておきたかった。

そして残り100メートルもう差は1秒くらいだつた。ここで全部の力を発揮する事だけを考えた。最後の100メートルを10秒台で走らないと負ける。それ以上遅いと負けが決定する瞬間だ。

「誰よりも速く前へ進め!! そうすれば勝てる!! 俺は最強だからいけエエ一人抜かす。もつと前まで行く。まだ二人もいる。今最後の二人と並んで残り1メートル。届けば勝てる。……勝ったアーレゾーーー」

こうして最高の勝負に勝つて、失恋から立ち直る陸上バカの物語であつた。

うん何事だと電車にいる人達が俺に注目される。何故だか分かるか。電車の中で俺は叫んでしまつたからだ。そんな俺は次の駅で降りて逃げる様に電車から降りて去つた。

俺は走つて家まで向かい、そのまま風呂には入つて寝る。丁度いろはからメッセージが来たが適当に返事を返してベットで寝たけどなんて返したか覚えていない。

こうして俺といろはの物語の初日は終わる。来週の水曜日まで。

電車でトオルが失恋を思い出してる時いろははどうしていた!?

比企谷さんが帰つてしばらくすると、誠司のお母さんが仕事から帰つて來た。

本当は誠司に反抗したかつたけど、まだ私には怖くて出来なかつた。あんな立派な頭を下げた人は見た事がなかつたんだよな。それで更に反抗出来なくなつてしまつた。

「どうして私がパーティーに参加する事になつたのは誠司の電話だつた。」

「焼肉パーティーするから来いよな」

と誠司が一言言つたら切られてしまつた。ヒドイと思いながら怖かつたので向かうしかない。着いたらすぐに

「おい、俺の目が死んでる友達の比企谷を連れて來い」

と言われて逆らえず迎えに行くと、一つ年上の細マッチョで少しは頼りになりそうな感じだつた。

思つていた通り、期待に応えてくれて、怖い誠司とビビらず私の為に頑張つて話してくれた。そんなトオルを見て私はときめきかけた。だけど誠司のお父さんの質問に答

えた一言で幻滅した。それを聞いた私は

「やっぱりそうですか。頼りにならない男ですね。ごめんなさい。許嫁は無して事でお願いします」

と誠司には言えず、目で比企谷さんに頼んけど当然思いは届いていなかつた。

誠司親子が嘘や恥ずかしがつてているだけと言つたけど私は今でも信じられない。

もうこれ以上考えたくないからとりあえず比企谷さんには、あくまで問題集作りを頑張つてもらつて、来年にはきつと会いたくないからサヨウナラ。誠司も遊びだと思えば良いと言つてたし良いよね。

ここまで振り返つていると、誠司のお母さんが帰ろうかて言うので、車で帰る事にする。仕事で疲れている筈なのに車で送つてくれる。お酒を飲まずに、誠司のお父さんが運転すればいいはず。だけど誠司のお母さんは文句は言わず運転してくれる。それに運転が上手で眠たくなる。

彼女の車に乗つたのは私だけで二人しかいない。誠司達は寝る時間が早いのでもう寝てしまつてゐる。

その時誠司のお母さんから話かけられた。

「どうだつたいはちゃん。トオル君はセイジちゃんの言う通り優しい人だつたの？」

相変わらず優しい声をしていて銀髪の美人で怖い人の様には見えないがキレると怖い。誠司のお父さんより2倍怖いのだから上には上がいると分かる。

「怖い人ではないけど優しい人でなきそ」

「そう、それは仕方がないことよ。男には面倒臭い意地とかプライドがあるからよ」似たような事を誠司親子も言つていたけど、やはり違うと思う。

「どうやら彼には当てはまらないとなると分からぬ」

（なんかこれじゃあ、比企谷さんが特別な男の人みたいになつていて嫌だ。）

「でもセイジちゃんはきっと運命の人だと思っている筈よ。だつてセイジちゃんは、いろはちゃんが彼氏が出来たら別れるようにしてやると言つていたわよ。」

少し引いたけど、それなら比企谷さんを少しは期待しても良いかもと思い始める。それと同時に幻滅するかもと矛盾してる思いがある。

まさか私が納得してる事はそうかもと思い早速聞いてみる。

「もしかしてそれで私のママとパパは説得されたの」

「ええ当然じゃない。誠司が選ぶいろはの男は彼しかいないと言ひきつたのだから。そして彼の凄さを語つたのよ」

私のママとパパは誠司の事を信用している。そのため説得するのは簡単だつたみたい。普通こういう時は『娘はやらん!』とかパパが言うものなんぢやないの?それを言

うのは誠司が言う事だつたの？

ここまで信頼されていたら更に説得しやすくなる。誠司の信頼を何度も褒めるのはしたくないけど凄いと思う。どう説得したのか私が聞く権利はある筈。

「ねえ教えて」

「嫌よ」

「ここでもう一度言つたらキレられてしまう。誠司の家はキレる人が多いから怖い。でも、誠司のお母さんは二人に比べたら怒つたりしないから話やすい。」

そう思つていると急に比企谷さんにメッセージを送りたくなる。でも向こうから連絡して欲しいから少し待つてみようかな。

「いろはちゃん」

「ええ、ビックリさせないでよ」

いきなり誠司のお母さんに話しかけられて驚いた。

「ごめんなさい。今メッセージでトオル君に送ろうとしていたのでしよう。いろはちゃんの顔を見れば直ぐ分かるわ」

「なんで分かるの？」

「付き合つて1年の時具咲ちゃんが浮気しないか心配で、気がついたら誰に連絡するか、分かるようになつたの」

誠司のお父さんは、しつかり大切にしていて浮気する心配が無い筈なのに心配しているんだ。私も比企谷さんの事を心配するのかな?違う、私は比企谷さんより素敵な人と出会つて、素敵な人と恋をする。

比企谷さんには申し訳ないけど、比企谷さんより素敵な人は沢山いるはずだから簡単。

「いろはちゃんから送つてあげたらトオル君喜ぶんじやない。先手必勝で主導権を貰うのよ。」

比企谷さんの主導権を奪つても何も良い事はないはず。分かっているのに気がついたらスマホを出していて、メッセージを打ち込んで送信していた。内容は

【比企谷さんは何しているんですか】

少し経つても返信はこなかつた。誠司のお母さんは言葉では何も言わないけど、チラツと時々覗いている。ママだつたら見せてと何度も言ってしつこいからマシかな。

【着いたわよ】

結局比企谷さんからメッセージが来る前に家に着いていた。もうダメかなと思いつら違う人からのメッセージで少し残念だつた。

学校で唯一親友と言つても良いかなと思う網ちゃんからメッセージがきた。なんで

こんなタイミングで来るんだろうと思つた。だけど彼女は同じクラスのため話す機会は沢山あつてメッセージで話す事がない。

そんな彼女からメッセージが来たから大事な話だと思う。なら自分の部屋に戻つて対応すれば良いかなと思いスマホをポケットに入れた。

しばらくして、落ち着いて話せる環境が出来たから中身を見た

「私の初恋の人に偶然会つた。」

たつた一文で私は実際に存在したんだと驚いた。彼女の初恋の人は声がデカく、細マツチヨのイケメンだと言つていた。それも会つた事があるのは今回が2回目で一度しか会つた事がないみたいで幻覚だと思つたけど二度見る事はから違うみたい。続きはどうやつて会えたかを書いてあつた。

「総武高校の制服を姉から借りて着て、その彼を探していたら出会えた」

又驚くことが書かれていた。まさか綱ちゃんに姉がいたなんて。彼女は一度も姉の話ををしてる所を聞いていないから仕方がない。

（仕方がないけど、少しは姉の話してくれても良いじゃないかな）

そして少しおバカな綱ちゃんの姉が総武高校だとは知らなかつた。だつてほら2回も会つたと書いていた。

（綱ちゃんが総武高校の制服を着たなんていいな）

最後にどんな風に会えたのかの続きを書いてあつた。

「ナンパされたいたら助けてくれてカッコ良くて固まつてお礼を言えなかつた。そんな事誰にも言わないでね。いろはちゃんにしか言つていないから」

返事返そうと思つたけど、言わんとて返事するしか考えつかない。

私も素敵な人と恋したい。そう思つた恋する相手が一瞬比企谷さんから返信が来た。
「俺は走つて家に着いたら速攻で風呂に入つていた。後ごめんね、目で許嫁は無して事

でお願いしますと君が言つっていたのに。嫌でもう少し君と関わりたくて言えなかつた。
もう一回言うけどごめんなさい。」

「えええ。先輩からかつていてるんですか。後心読まないで下さいよ」

気がついたら叫びながら返信を返して いた。

【私と関わりたいからなんて言われてもきらめいたりしませんからね】

そう送信して直ぐ音声のメッセージが送られた。

「俺はときめかせてやる。絶対に言わせてやる。もう眠いから寝る。おやすみ」

絶対言いませんからと送信しようと思つたけど出来なかつた。

続く

71 電車でトオルが失恋を思い出してる時いろははどうしていた!?

誠司はトオルと出会つてすぐに、いろはを紹介した理由 はなんだ!!?

俺はゴールデンウイーク最終日、トオルに電話をかけた。なんでこのトオルて男はいろはと許嫁になつたのかが気になるからだ。もしや俺が勘違いしているのは精神的なダメージを与える男なら嫌だ。

電話を掛ける事は決めて覚悟は出来たつもりだつた。だが、やはり電話は慣れていいから緊張している。ボタン一つ押せば繋がる所まで来ているのに押す覚悟ができるといない。

深呼吸をして勢いよく電話が繋がるボタンを押した。

俺の繋がれの思いをトオルが感じたのか直ぐに電話が繋がりトオルの声が聞こえた。

「なんかようか誠司？……もしや喧嘩したからスケットとして来て事じやないだろうな？」

「俺が喧嘩を直ぐする馬鹿に感じているのか？ そんなことで迷惑かけないから安心しろ」

「じゃあゴリラが近くにいてそいつをボコボコにした話をしようとしてるのか」

コイツなんで喧嘩の話ばかりしているのだ。全然俺ケンカするイメージしかアイツにないのかよ。これは話が進まない。俺から言い出すしかない。

「するかよ。俺が聞きたいのは何でいろはの許嫁を受けたのかが聞きたかつただけだ!!」

「ビク」

どうやらトオルはびびつてしまつた様だ。確かに迫力があつて怒鳴つた声で言つたからその気持ちも分かる。だがトオルは直ぐに返事を返してくれた。優しいやつだ。「ハア仕方がないか。俺の最高な友達を作る為にいろはを利用しているだけだ。自分で言つておきながら最低な男になつたもんだ」

「気がついているのだろう本当の狙いは違うと」

「なんのことと言つているのかさっぱり分からない」

俺は動搖している声を聞いて安心した。この男は絶対悪い男ではないと分かる。そ の理由は今からトオルに言う。

「まずそもそも友達を作る事は出来ない筈だ。出来たとしても相手からは友達の知り合いとなる為友達になるのは無理だ。」

「それは確かにそうかもしねない。だがなら俺の野望は何だと言うのだ」「野望て俺は言つていない。狙いだと言つたのだが、野望と言つてゐる時点で怪しい」

トオルは無言状態となり会話は止まつた、俺は無理矢理でも会話を再開させる。

「友達を作る事は不可能だと気がついていた筈だが、いろはと関わりたくて無理矢理言い訳を考えた。そうだろう年下好きな男さんよ」

「分からぬ。それが本当の理由なのかが分からないが、そんな感じかもしない」

さて、もう少しこの話を続けても良いが、即答で答えを聞くことが出来たから満足だ。ただ隙があれば話を再開するつもりだ。

「なあ、お前はどんな気持ちでいろはと関わるつもりなのだ」

「俺は【レンタル彼女】だと思っている。アニメの主人公みたいな感じかな」

「なあ気づいているか。彼女にしたいともう言葉で言っているぞ馬鹿。

それと【彼女、お借りします】て懐かしいな。第2シリーズの1話を見てこの世界に飛ばされたけど」

そう俺は転生者であるのだが自分でも忘れてしまうのだよ。だつて、何も困った事がなく生きているから前世と変わらない。ケンカを沢山して女子をナンパする日々だ。今では20人彼女ははいるだろうか。勿論その内5人しか関わっていない。そろそろ他の15人と別れるかな!! 全員ヤンキーな。

「へえそうなんだな。俺は一期しか見ていない。彼女て言つても偽物だから彼女にしたいとは思わない」

「レンタル彼女て思っている人は、本当に好きではないのかな!?お前は主人公と違い特に彼女いなくて困つていらないだろう。やはり好きで感じになつてるのでないか?」

「さつきも言つたけど分からぬいだろ。それは俺が本当に彼女の事を好きなのか直ぐに答えは出ないのでだから。だつてまだ初日だぜ。分からぬいよ!! だけど俺は恋愛をしてる暇がないから分からぬくていい」

トオルは失恋した事がある様に言つてゐる様に聞こえる。まるで恋愛する事が嫌なのではなく失恋したくない男の気がする。だけど恋愛する暇はなく彼は走ることにしたのだろう。それは車に轢かれて入院してスタミナは大幅になくなつた事が原因だ。

それを少しでもカバーする為に練習をしないといけない。これがプロを目指す男の挑戦である。それが良い方向に行く事を願うだけではなく、彼に恋愛させたい。

「最後にお前は恋はしたいのか?」

「したくない。どうせ振られて失恋するだけだとわかつてゐるからな。告白していろはいや違う。告白して困らせたくないし、俺のメンタルの為にもしない。」

トオルは動揺しているから、いろはの事がやはり好きなのだろう。

「ありがとうな。さようなら」

「あばーよ」

やはり俺の決断は間違つていない。

ここからは何故トオルを選んだのかについてだ。

「あれは今から約1ヶ月前の入学式の日」

出会いは運命的な感じで、俺がナンパしているとトオルが邪魔して来た。俺はムカついて

「ナンドトコラ」

そう叫ぶと大抵の人間は逃げてしまうが、この男は止めに入った。彼女の知り合いだとは思えないし、関係がない。それでもトオルは諦めず説得をする彼を見て感動した。案外感動しそぎだと思うかもしれないけどこんな男と会った事がない。

そんな男と出会い俺は直ぐに珍しく諦めた。滅多にない事が感動した俺にとつてはどうでも良い事だ。それに俺がナンパすると良い相手を教えてくれたのでいつかナンパするつもりだ。

更に感動する出来事が10分後くらいにあった。俺は感動して学校に逆方向に走ってしまう。行く方向はトオルと同じだつた。すると突然トオルは走り出した。その走るフォームを見て素人な俺だが感動したし、風だと思うほどトオルは速いかつた。何故走るのか気になつて走つて追いかけたが、トオルに追いつく事は出来なかつた。

遠くて走っているのに離されてしまい、遂に目で見る事が出来なかつた。

目で確認した時にはトオルが車に轢かれてしまつていた。何故トオルは馬鹿な事をしたのか考えながら救急車にスマホで電話をした。

そして電話をしながら、トオルは犬を助ける為に車に轢かれてしまつた事がわかつた。俺はそんなトオルに感動した。なんとしても恋愛させたいと俺はそう思つてしまつた。

無事に救急車にトオルは、運ばれて安心して学校に向かう。

ここまでがトオルとの出会いの話だ。

ここからは俺が動き出していろはを紹介する物語だ。

俺はたまたま救急車から名前と何処の病院に運ばれたかを、聞こえたから3日後に向かつた。俺の耳は良かつたらしく、関係者に聞いてトオルがいる事が分かつた。

そしてトオルの個室で出会い、彼女はいるのかを確認する。勿論聞かない。妹だけで、連絡を取り合う友達がいない事がわかつた。もしくは忙しくて連絡が取れない可能性もある。だが彼女はいない事がお見舞い品を見て確認出来た。

だが妹の未来が持つて来たのはお見舞い品ではなく、バケツに水が入つていた物で驚いた。

俺はトオルと相棒と言える程仲が良い関係となつた。まさかあんな一瞬で友達にな

るとは思わなかつた。俺は想像していた以上の男だつたみたいだ。

最後にバイトの話をして引き受けてくれそうな感じではない。

「バイト代が出るし原作キャラに会わせてやる」

そう言うとトオルは真剣に考えていた。どうやら原作キャラが会える事が条件としてよかつたみたいだつた。バイトの内容は教えないことに悩んでいた。だが怪しいと言われてショックを受けて何も言わず帰つた。

次の日再びトオルの部屋に訪ねようとと思い小町と出会う事となつた。

「お兄ちゃんの知り合いでですか」

と聞かれた俺は領き直ぐに返事を返した。

「ああそだ俺はトオルの友達だ。ほら写真があるぞ。」

病院の中で撮つた写真を見せると納得して俺が誰だか理解したようだ。

「誠司さんですね」

「はい俺が誠司です」

この話はいつか又続く

79 誠司はトオルと出会ってすぐに、いろはを紹介した理由はなんだ!! ?

俺は死なない

俺の学校生活はやつと始まる。本当に長いどれくらい待てば良いのかなと思うほど長かった。だけど病院生活は楽しくなかつたけれど終わつてからはそここ楽しめた。ゴールデンウイークには誠司から電話が掛かつて来て驚いた。でも俺はまだ答えは出でていない。なんと答えれば良いのかが分からぬ。でも悩んだ先には何かが見えて、良い事が起きそうな感じはする。だがきっと正解の選択をした場合のみ良い事が起きると思う。

他は姉にサングラスを買いたいから買つてと言われ、買つたから今お金がない。何だよ彼氏ができたから凄いのかよ。自慢する相手俺じやなく、小町にしろよ。あそعادつた、彼氏ではなく、姉の初恋なだけであれから全く進展がないみたいだ。

だつて進展がある人はアニメで恋してゐる人は良く笑うか、ツンデレかのどちらかだと思う。姉の場合元々ツンデレだから笑うと思う。だつて元からツンデレはデレている筈だと思う。だけどその相手にはデレるかが分からぬ。

(じゃあ俺なの)

と思いたくなるけど多分違うと思う。

更にサングラス買うのを俺に選ばしてくるから全く理解できない。本当に俺の姉なのと言いたくなる程だ。俺だつたら好きなサングラスを選ぶから考え方が違う。もしかしたら男が選ぶのが知りたいなら俺にしない事をお勧めする。

だつてセンスないし、一度凄いと思つても二度みたら酷いと思う。特に俺の美術の作品はそう思う。先週の絵の具の続きをする時なんか

(なんだこの下手くそな絵は、酷すぎる。良い作品が出来たと喜んでいたのに)

そう思つてしまふ体验でないかな。俺の経験では良くあるパターンだと思うよ。なんでいいと思う作品が悪く感じるのかが今でも理解が出来ない。

さてここで問題。俺は何回全く分からんと思つた。正解はコマーシャルの後。

はいコマーシャル終わり。ただの無言のコマーシャルはつまらない。ここから話を戻してやつと学校に登校出来る喜びで、再び興奮してしまい、7時には自宅を出た。

学校に着いて自分の席を確認して座つた俺は今、準備を済ませた。待つても早く来すぎて誰も来ない。ひたすら待ち続ける。暇だったので黒板で落書きを開始する。勿論悪口は書いていないし、そもそも悪口を黒板に書く相手がない。

俺に知り合いは居ても陸上友達で嫌いな人は誰も居ない。それよりそろそろ落書き

を消して待たないと怖い人だと勘違いされるかもしれない。俺の目は死んでいる様に見えるから余計にな。

落書きを消し終えた瞬間に、俺のクラスが一人来たけれど全く話す気配はない。それからは、とにかく椅子に座り続けて話してくれるまで待ち続ける。そんな予定なのだがいつまで経つても時間が過ぎてしまい朝の会になってしまった。

先生は俺が入院していたことを忘れてしまい、自己紹介はされず、期待した俺がバカみたいだつた。それはそこで走る事以外存在価値がないと言われてしまい、そろかもと思つてしまつたがムカつく。自分がそう思つても他人に言われると嫌だ。

朝の会が終わると、既にクラスの中心となる人物は決まつていて、集まつている。入院した俺には参加する権利などなかつた。そもそも入院した事が伝わつていない時点でも不利である。逆転する方法などはなく、どうやら上手くいかない。

そう言う時こそ罰ゲームカードのゴールドを使つて友達を作りたい。勿論冗談で偽物の関係で終わるはずだから意味がない。そんなので手にいれたくない。そんな考えの俺が何故いろはとそんな偽物の関係にしてしまつたのだろう。

結局答えは出ず1時間目が始まるも授業に集中せず、ひたすら考え続けるも答えは出ない。もしかしたらもう少し偽物の関係でいたいと望んでいる。俺は大嫌いな偽物の関係を否定したいのだが、出来なかつた。

それが今できる解答かつまらない。もつと違う答えが欲しいけど俺は見つける事ができない。そんな簡単に答えが分かる方がもつと嫌だ。本当に矛盾しているよ。

俺が高校卒業して死ぬ事がなければそんな事はしない筈。そう、ただの思い出作りの為にしているのだ。だけど俺は思い出作りの為にせず、本当の恋をするんだ。

その為に死のループで死ぬ訳にはいかない。もつと長生きしないと終われない。

すると俺は卒業では無いのにワープされてしまう。試練に挑む事になつたけれど負けない。ナイフに刺されていたけど死はない。次の世界に飛ばされる。車に轢かれて死はない。50階のビルから落とされても死はない。俺は死なないから大丈夫。

だって恋するには高校卒業した後が大事なのだから負けないから死はない。ドラゴンボールの悟空のかめはめはを受けても死はない。こうして俺はクリアしたのだ。

試練の内容は単純で生きていていい気持ちがネガティブな感情よりあればいい。俺はそんな事が出来なかつたけれど今俺は出来たのだ。

恋は人を強くすると言うけど本当の事だつた。俺は無事ワープして元の世界に戻つて来れた。俺の求めた答えの為に頑張るのだ。

俺は死はない。だって俺は本物の彼女が欲しいから。その気持ちがあつたから俺は死はない。死はない俺の物語は続く。

やはり俺は恋したい男だから。

偽物の恋と本物の恋どっちが好きですか!!

につづく